

幼児期における「粘土場」遊びの教材性

川俣美砂子¹・阿部鉄太郎¹・玉瀬 友美¹・三ツ石行宏¹
山中 文²・矢田 崇洋³・大西 美玲³

The Meaning of Teaching Materials Based on Clay Play and “Art Clay Topos”

Misako Kawamata¹, Tetsutaro Aba¹, Yumi Tamase¹, Yukihiko Mitsuishi¹
Aya Yamanaka¹, Takahiro Yada², Mirei Onishi³

1: Faculty of Education Kochi University, 2: Faculty of Education Sugiyama Jogakuen University, 3: Kindergarten Affiliated to Faculty of Education, Kochi University

要 約

本研究は、「粘土場」遊び実践での幼児を観察し、行動の様子や変化を把握することで、「粘土場」遊びが、幼児教育で従来から実践されてきた粘土遊びの教育的意義（①身体的機能や感性の観点、②情緒や社会性の観点、③創造性や科学性の観点）を発展的に持ち得ていることを実証し、その教材性を捉えることを目的とした。その結果、幼児全体の活動を観察した場合でも、抽出児を観察した場合でも、全身を使った遊びが、個人あるいは他の幼児と協同しながら、多種多様な動きや思考を伴って行われており、「粘土場」遊びは、幼児期の粘土遊びとしての教育的意義を十分に満たしていることが、明らかになった。さらに、幼児が個々で活動することが多い従来の粘土遊びよりも「粘土場」遊びの方が、より身体的・協同的な作業が生まれること、それらによる思考や工夫が生じることなどから、更に発展的な教材性を持つことがわかった。

キーワード：「粘土場」遊び、粘土遊び、教育的意義、教材性

問題の所在

「粘土場」とは、「砂場はあるのになぜ粘土場はないのか」（前嶋 2009）¹という問いから始まった設備で、「子どもたちが1年中、自由に大量の粘土で遊べる場所」（前嶋 2007）²である。

筆者らの所属先では、附属幼稚園との教育連携として、幼児教育プログラムの試行を実践している。

「粘土場」遊びは、年長児を対象として2015年度より開始した、そのプログラムのひとつであり、大学の陶芸室に配置した彫塑用粘土約500kgを使って、年長児がおよそ45分間思い思いに遊ぶという活動である。本「粘土場」遊びは、上記の前嶋（2009）の提唱に基づいて、筆者を含めた大学教員と幼稚園教員が協同して計画を立て、粘土の配置、粘土以外で使用する教具等を決めて実施している。

「粘土場」遊びは、幼児の遊びとして教育的意義を持ち、教材性があると言えるのか、幼児の「粘土場」遊びの観察を通して検討していく。

1. 研究の背景と先行研究の検討

粘土を使用した遊びは、幼稚園教育要領（文部科学省 2017）³、及び保育所保育指針（保育所保育指針 2017）⁴では、主に、感性と表現に関する「表現」領域にかかわる遊びとして捉えられている。

「表現」領域の活動のねらいは、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」と明示されている。

粘土遊びは、その「表現」領域の指導する「内容」の、特に「(1)生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。」「(4)感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。」「(5)いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。」とかかわった教材性を持っていると言えよう。

しかし、前嶋(2014)⁵が保育者を対象として行った粘土遊びに関する調査によると、粘土遊びは保育現場では必ずしも満足のいく保育活動としては捉えられていなかった。

前嶋の調査結果から、保育現場で行われている粘土遊びの活動状況について見ると、個人用粘土を使用して活動している割合が一番高く(74.8%)、保育者が思う子どもが好きな粘土遊びは、多い順に、食べ物作り、お団子作り、型抜き遊びであった。筆者らの経験からも、ケースに入った個人持ちの粘土を、手でちぎって粘土板の上に広げ、伸ばしたり丸めたり、粘土ペラで切ったり、型抜きをしたり、身近な食べ物を作ったりという活動が1人もしくは数人の子どもたちで行われている状況を、想像することができる。

また、回答した多くの保育者が「粘土遊びは重要である」(81.8%)と感じているが、「粘土を使った指導に満足している」と回答した保育者は少なかった(8.6%)。更に、前述した使用頻度が最も多い個人用粘土でも、設定保育で「週1回以上」使用するのは9.6%であった。他にも、粘土遊びの題材は描画遊びに比べると大変少ないと感じていたり、土粘土(水粘土の通称)の使用も希望しているが、保存方法を理解できていないということも明らかになっている。このように従来からの粘土遊びは、幼児の遊びとして実践されてはいるものの、保育者は自分の指導法に満足していない。ゆえに、その影響を受ける幼児が、粘土遊びの活動を活発に展開しているとは考えにくい。

幼児教育における粘土遊びの実践を考察し、指導方法を提案した藤原(2015)⁶は、粘土遊びの教育的意義について①手触りや重さを敏感に感じ取ることができて「身体的機能や感性を高める」、②可塑性があり何度でも作り直すことができ「創造性を育む」、③自分が働きかけた行為によっておこる結果を確かめながら次の行為へ発展させることから「科学性を育む」、④素材の持つ手触りと思いのままに形を変えることができる特性によって「情緒を安定させ」、集団での共同的な関わりを通して「社会性を育む」という4点を挙げている。

また、「粘土場」遊びを提唱した前嶋(2009)に加え、本研究を進めていくうえで有用な先行研究としては、大量な粘性のある土環境を設置した竹井(2012)⁷がある。「粘土場」遊びに似た環境であるが、この場合は、富山県の採石場から出た「利用土」(砂利など商品となった後の不用な粘土混じりの土)を幼稚園に持ち込んで、砂場とは異なる粘性のある土環境を作り、4~5歳の遊びが観察されていた。それによると、大きな広がりを見せた4~5歳児の土環境での遊びは、①感覚的な遊び、②造形活動による表現遊び、③造形物を活かしたごっこ遊びに分類されていた。この環境提案は「場」の設定として参考になるものであるが、使用する素材は限定されている。また、藤原(2015)の提案は粘土遊び全体の教育的意義をまとめたものである。そこで、より素材的に一般化されている粘土を「場」として設置し、その環境で遊ぶことが、粘土遊びの教育的意義を深めるものであるのか、という点から「粘土場」遊びの教材性を実証したいと考えた。

2. 研究の目的

以上から、あらためて幼児教育における粘土遊びを検討すると、幼児が身体的機能を使って触覚的感性を高めたり、粘土の可塑性、粘性、重量性等を通して科学的に思考したりする点で、幼児教育教材として適していることが推察される。しかしそれは、先述したように、粘土遊びが実施され

る環境や指導法等に大きく影響されることも、保育者を対象とした調査から明らかになっている。先行して「粘土場」を実践している前嶋（2016）⁸は、保育現場で活用できる粘土遊びの具体的な環境モデルの必要性を述べている。

本研究では、このような問題意識および先行研究から、前嶋の提唱する「粘土場」を実際に設置して「粘土場」遊びを実践し、その「粘土場」遊びにおける幼児の行動を観察する。そこから、その行動の様子や変化を把握し、「粘土場」遊びが、幼児教育で従来から実践されてきた粘土遊びの教育的意義を発展的に持ち得ていることを実証し、その教材性を捉える。

3. 研究の方法

(1) 「粘土場」遊び全体の活動観察

- ・日時：2016年《1回目》5月20日、《2回目》6月24日、《3回目》9月9日、《4回目》10月28日の計4回、13時から14時（実質活動時間は45分程）。活動スケジュールは、「粘土場」遊びのルール説明（5分）、「粘土場」遊び（45分）、まとめ・片付けと手足洗い（10分）である。
- ・場所：高知大学教育学部陶芸室
- ・対象：F幼稚園年長組5歳児約40名
- ・使用した教材：彫塑用粘土^{注1}約500 kg
- ・方法：「粘土場」遊び実施時に、幼児の活動のビデオ録画、写真撮影及び観察記録を行った。ビデオ録画は、定点カメラで活動全体の撮影（1台）と大学教員が幼児の活動の特徴的部分を撮影したもの（2台）、写真撮影は引率の幼稚園教員が行った。筆者らは、「粘土場」遊びの最中は、幼児の動き、言葉、幼児同士の関わり、活動への意欲等を観察し、メモを取ったり、終了後にビデオを見て振り返ったりして、観察の記録を記した。
- ・場の設定：「粘土場」遊びの活動内容は、大学の美術教育教員主導により、活動ごとに幼稚園教員や筆者らと検討を踏まえて、粘土の配置や道具等の設定を変更していった。
- ・目的：「粘土場」遊び全体を見通した際の幼児の特徴的な活動を抽出する。

(2) 「粘土場」遊びにおける抽出児の観察

- ・日時：2016年9月9日13時から14時（実質活動時間は45分程）
※抽出児の観察は、2016年の活動観察期間中に、合わせて行ってきた。その中で今回は、活動日程中盤で子ども達が「粘土場」に慣れてきた9月9日の事例について述べる。
- ・対象：F幼稚園年長組A児（男児）
- ・場所、教材、方法は、(1)と同様である。
- ・目的：(1)で観察された全体の遊びの特徴が、幼児1人を対象に1回の活動を観察した場合、どのように出現するかを把握する。
- ・抽出児の選定：対象とした抽出児に関しては、担任教員が、造形活動への興味関心や、友達関係等から、平均的な5歳児としての発達を有している幼児を選んだ。

なお、倫理的配慮は、対象者である幼稚園児の保護者に対して、研究参加の説明と同意の手続きが適切に行われている。個人情報、プライバシーの保護に関して、ビデオ及び写真撮影は帽子を着用して行い、個人が特定されないよう最大限配慮した。また、研究成果公表に際し、使用する画像データは慎重に選択し、その他データも匿名化を行っている。対象者の精神面、体方面の負担を考慮して、子どもの日頃の様子を把握している担当教員が引率して一緒に活動し、附属幼稚園から大学への移動も大学所有のバスを使用した。

4. 結果

ここからは、観察記録を通して見た、「粘土場」遊びでの幼児の活動の変化を見ていく。その際、「粘土場」遊びが、粘土遊びの教育的意義を捉えているかを、藤原（2015）による粘土遊びの教育的意義の分類を参考にして、本研究では、「身体的機能や感性の観点」、「情緒や社会性の観点」、「創造性や科学性の観点」から、「粘土場」の教材性を検討していく。

(1) 「粘土場」遊び全体の幼児の活動

「粘土場」遊びでは、「身体的機能や感性の観点」からは、次のような行為が抽出された。

まず、手先の細かい動きを伴う活動については、1回目の「粘土場」遊びで、小さな粘土のかたまりを、千切って丸めた団子状のものを各々で並べる個人活動が見られた。2回目の活動になると【写真1】のようにキャンディやドーナツ等、製作物の種類が増え、自分が作ったものと友達が作ったものを話しながら一緒に並べている光景も見られた。3回目になると、伸ばしたものを曲げたりクロスさせてリボンにしたり、練って広げて皿にしたり、様々な技法を使って作った作品を組み合わせ、置く位置も考えて、水族館【写真2】が出来上がるという、平面ではない立体的な作品が見られた。



【写真1】



【写真2】

「粘土場」遊びを体験した初めの頃には、比較的、写真1のような、作ったものを平板に並べていく活動が多かったが、活動が進むにつれ、写真2のような、自分にとって重要な対象（この場合は水族館にいる人魚）を作品の中心に存在させたりと、配置を考えたいうで立体的に並べたりする行為が見られた。

運動機能を伴う大胆な活動は、比較的早い段階からあった。ある程度の大きさのある粘土のかたまりを積み上げて山にする、積み上げて高くなった山に上る【写真3】、山から大きなかたまりを掴んで千切り、他の山へ運ぶ、山の粘土の分量が少なくなった部分を足で踏んで平らに均す等の、腕力や腹筋、足の底屈力（踏む力）が必要な活動が行われていた。



【写真3】

「情緒や社会性の観点」からは、次のような行為が抽出された。友達や教員との協同的活動への発展である。1回目の活動から、粘土を積み重ねて山を作る様子は見られたが、初めは、教員から手渡された粘土を運んで積み重ねたり、自分で他の場所から粘土を持ってきて山を作っている姿が多かった。しかし、3回目の活動で見た幼児の姿は、まずは教員から手渡された粘土を運んで積み重ね、その後、自分1人で粘土を取って運んで積み重ねるようになり、その後、それを見ていた他の幼児が参加し、運び役、積み重ねる役と、役割を分担して山を作り出すという展開が見られた。

また、粘土の山をより大きく高くしてトンネルを開通したり、山を数人で押して動かしたりして、別の山に合体するという作業も、1人ではできない、複数の幼児との協同が必要であった。粘土の大きなかたまりを、踏んで平らにするという遊びは、先に述べたように底屈力を養うことにもなるが、粘土の粘性を体感する活動にもなっており【写真4】、並んで踏んでネチャネチャした粘土の触感

を共鳴し合っているようにも見えた。

また、2回目の活動から片付け時に、クレイカッター（細いワイヤーの両端に木の取っ手が付いたもの）が使用されるようになった。粘り気のある粘土のかたまりに細いワイヤーがくい込んで行く【写真5】ことで、粘土があっさりと切れるのを発見でき、粘土を切る心地よさも体感していた。その心地よさのため、片付けというよりも、それを行うこと自体が遊びに変化していた。薄く切り取った粘土自体や、粘土の切断面の形に興味を持つ幼児もいた。



【写真4】

「創造性や科学性の観点」からは、次のような行為が抽出された。壊れた作品の使用方法の発見である。壊れることはマイナスばかりではない。前回作成した粘土の作品が壊れてしまった幼児は、乾燥した破片を利用して、魚のうろこや人形の洋服の模様を作成した【写真6】。固まった粘土が割れることで、細かくなったり粉になったり、形が変形することによって、他の利用方法を知り、表現のバリエーションが広がっていったのである。



【写真5】

ここまででは、「粘土場」遊び全体の幼児の特徴的な活動を取り上げてきた。「粘土場」遊びは、粘土という1つの教材を使用しての遊びであるが、幼児の遊びは、「粘土場」という環境を得たことで、粘土遊びの教育的意義の3分類を十分に満たした、多種多様な遊びに展開されていった。



【写真6】

しかし、予め示したように、上に紹介した「粘土場」遊びは、全4回に渡って幼稚園の年長児40名が活動した遊びであるので、多種多様な遊びの展開が見られたのも当たり前かもしれない。そこで次からは、ある1回の1名の幼児（A児）に焦点をあてて、観察した記録を紹介する。

（2）「粘土場」遊びにおける抽出児の活動

ここでは、A児の9月9日の「粘土場」遊びを、A児が行った流れに沿って提示する。前出の粘土遊びの教育的意義3つの分類（①身体的機能や感性の観点、②情緒や社会性の観点、③創造性や科学性の観点）に関しては、その番号を遊びの後ろに振っていく。

A児は、活動が始まって早々、1人でクレイカッターを使用して、粘土を切っている。切ったはずの粘土が再びくっ付いていく、粘着性の不思議さを感じているようである<①③>。次に、クレイカッターの両端に付いている棒を粘土に刺し、棒を刺した後の穴に指を入れている。棒が刺せる柔軟性、刺した後に穴が開いたままになっている可塑性を、自分の指を入れて確認しているのである<③>。

続いて、大山から小山へ、クレイカッターで切り取った粘土を運んで乗せるという動きを繰り返す。腕の力を使って持ったまま移動するという運動を繰り返しているのである<①>。

移動を繰り返した後、元いた場所に戻ってみると、他の幼児が丸めた小さな粘土がたくさん並んでいるのに気づき、自分でもやり始めた【写真7】。手先を使う新しい遊びを始めたことと、友達の続きを行うことの喜びを感じている表情が見られる<①②>。

次は、B児と話しながら、2人で平らになった粘土の上に座っている。重量をかけると粘土がへこむ感覚（変形性）を2人でタイミングを合わせて座りながら楽しんでいるようである【写真8】。本日の活動が始まってから初めての、他の幼児との直接的な関わりである<①②③>。B児が、座っていた粘土の端をめくって千切り、大山へ運んで行った。B児を真似てA児も試みるが、力が足りずできなかつた<①②>。



【写真7】

A児の「粘土場」遊びは、次々と展開し、次は、粘土の上に座り込んで自分の足に粘土をかぶせ、足を埋めている。複数の幼児や教員も手伝って一緒に行っている。粘土が接着し合って長靴になり、粘土の接合性の強さを体感している。友達や教員が手伝ってくれる協同性の楽しさも感じている<②③>。



【写真8】

活動終盤となり、片付けの合図があった。他の幼児が座っている中、粘土の長靴を履いた自分だけが立っているの、少々焦りを感じている【写真9】。自らクレイカッターで粘土を削り、脱出する。集団への遅れに焦りを感じながらも、何とか自分で解決している<①②>。



【写真9】

粘土の片付け最中に、B児が粘土をたくさん掴んで片付けボックスに投げ込むと、大きな響きの良い音がした。A児も、B児と同じような響きの良い音を出したいと思っている様子が見て取れた。粘土の量と音の大きさが比例することがわかっているようで、大きなかたまりが必要だと感じている。しかしA児は、手の力が足りないのか、小さなかたまりしか掴みだせない。B児が手本を示すように、大きなかたまりをA児に示してから投げ入れるので、羨ましそうに笑っている<①②③>。そこへ、「粘土場」遊びに参加していた大学の教育実習生が、A児に大きな粘土のかたまりを手渡した。嬉しそうに投げ入れに行く。友達のようにすることができるようにになりたいという憧れの気持ちが活動への意欲につながっているようだった<①②>。次は、自分で粘土をかき集め、何とか大きなかたまりを作って投げ入れた【写真10】。自分でできたことへの満足そうな表情が見られた。



【写真10】

ここまでは、「粘土場」遊びでの、ある1回の1名の幼児に焦点をあてて、観察した記録を提示しながら、並行して粘土遊びの教育的意義の3分類を示していった。

この日のA児の「粘土場」での遊びは、「身体的機能や感性の観点」からは、手先、腕力、脚力、腹筋等の全身を使い体感しながらの活動が見られ、「情緒や社会性の観点」からは、個人的にも集団的にも活動が行われることで仲間意識や信頼関係が育まれており、如何にして大きな粘土のかたまりを作るか、運ぶか等、多様な思考を伴って工夫された「創造性や科学性を育む活動」が行われていた。

「粘土場」遊びは、抽出児1名の1回だけの活動を振り返っても、粘土遊びの教育的意義を満たす、

幼児が充足感や満足感を得られる活動であった。

5. 考察

本研究では、「粘土場」遊びの幼児の活動を観察記録から具体的に提示しながら、その活動内容を粘土遊びの3つの教育的意義（①身体的機能や感性の観点、②情緒や社会性の観点、③創造性や科学性の観点）に分類し、「粘土場」遊びの、幼児教育の粘土遊びとしての教材性について検討してきた。「粘土場」遊びでは、手先の動きを伴いながら作られる製作物が、平面的なものから立体的なものへ変化したり、その際の活動が、個人からグループへと変容していった。また、「身体的機能や感性の観点」からは、運ぶ、乗るといった従来の粘土遊びにはない教材性や、子どもたち同士が協力して作品化していくという教材性も見られた。また、「情緒や社会性の観点」からは、友達や教員と活動をともに楽しむ安心感や、粘土を踏んで粘着性を体感したり、クレイカッターを使って粘土を切る心地よさを味わったりという、これも従来の粘土遊びでは経験することのできない「粘土場」ならではの教材性であろう。さらに、「創造性や科学性の観点」からも、前回の作品が乾燥した破片を、今回の作品に利用するというモノの時間経過による変化を体感することができる教材性が表れていた。それは、幼児全体の活動を観察した場合でも、抽出児を観察した場合でも同様で、45分という短い活動の中で、全身を使った遊びが、個人あるいは他の幼児と協同しながら、多種多様な動きや思考を伴って行われていたのである。

前述した前嶋（2014）で実施された保育者を対象にした粘土遊びに関する調査結果では、保育者は、粘土遊びについて必ずしも満足のいく保育活動とは捉えていなかった。

これらに対して、本研究で報告した「粘土場」遊びは、上記の結果で述べたように、幼児の活動の中で、より身体的・協同的な作業が生まれること、それらによる思考や工夫が生じることなどから、幼児が個々で活動することが多い従来の粘土遊びよりも発展的な教材性を持つと言えよう。

今後の課題

本学での「粘土場」遊びは、前嶋（2009）や竹井（2012）のように、子どもたちが1年中、いつでも遊べる場所とはなっていない。そのような中でも子どもたちは、その機会を捉えて、瞬時に「粘土場」遊びに入り込み、心を躍らせて活動している。できるだけ多くの機会を整えたいと思うとともに、粘土遊びへの苦手意識やあまり良いイメージのない保育者へ、「粘土場」遊びの楽しさを知らせ、広く保育現場で「粘土場」遊びができるような環境を整備できれば良いと考える。

また、「粘土場」での粘土の配置による幼児の活動の変化や、粘土に加えてのカッターやボード等の教材の入れ方についても検討の余地があり、今後の課題である。

【注・引用文献】

注¹ 彫塑用粘土は、水粘土の一種で、粘土の微細部分からできているため、粘り気が多く可塑性に富んでおり、成形が自由にできる。そのため、量感や心象性を表現しやすく、水分量によって素材性や手触りが変化する。油粘土に比べて、汚れが落ちやすく、においが少ない。乾燥すれば石のように硬くなるので、貯蔵容器に保管し、表面に水を撒いて、ビニール袋をかぶせておくなど管理をすれば、何回でも練り直して使用することができる。重量があり、大きなかたまりを持ち運ぶのは容易ではない。

¹ 前嶋英輝「粘土場の遊びと環境」美術教育No. 292、2009、p.76-84

² 前嶋英輝「幼児造形教育のための粘土場による実践」順正短期大学研究紀要第36号、2007、p.71-77

- ³ 文部科学省『幼稚園教育要領』フレーベル館、2017、p.11-12
- ⁴ 厚生労働省『保育所保育指針』フレーベル館、2017、p.18-19
- ⁵ 前嶋英輝『粘土遊びに関する幼児造形教育法の確立』科学研究費助成事業（基盤研究C）報告書、2014、p.6-34
- ⁶ 藤原逸樹「粘土遊びの指導法に関する一考察」安田女子大学紀要第44号、2015、p.191-198
- ⁷ 竹井史「子どもの造形的な遊びを活性化する土環境に関する考察」美術教育学第33号、2012、p.263-274
- ⁸ 前嶋英輝「幼児のための粘土遊び設備の構築」吉備国際大学研究紀要（人文・社会科学系）第26号、2016、p.13-39